

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

The effects of intergroup competition on social projection

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 美恵 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/511

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



集団間の競争的，非競争的關係が 社会的投射に及ぼす影響

田 村 美 恵

問 題

ある特定の行動や判断，態度などに関して，人々はどのようにして「合意性」——それらが他の人々の間でどの程度合意／共有されているのか，その割合——を推定するのだろうか。従来の研究が明らかにしてきたのは，我々が，自分自身の行動や判断，態度などを基準（手がかり）にして，それらを他者に投射（projection）することにより合意性推定を行うということである。

「社会的投射」と呼ばれるこうした合意性推定のあり方は，人が，自分自身の行った「個人的な」行動や判断など（自己の立場）を，「多くの人々に合意／共有されているもの」として，過度に一般化／正当化する傾向を有することを示している（Ross et al., 1977; Clement & Krueger, 2000; Krueger, 1998, 2000）。言い換えれば，現実社会についての我々の認識（社会的リアリティ）の一旦は，このような自己中心的（egocentric）な推定によって形作られているとも言えるのである。

ところで，社会的投射は，従来，数多くの研究で追認され，その頑健で，安定的な性質で知られてきた（for reviews, Krueger, 1998; Marks & Miller, 1987; Mullen & Hu, 1988）。しかしながら，近年，社会的投射が抑制され，その頑健性が及ばない状況が存在することが明らかになってきた。

それは、「内集団」対「外集団」という集団間状況下での検討において見出されている。

そこでは、社会的投射は、「内集団」においてのみ顕著に見出され、「外集団」においては、それらはほとんど見出されないか、かなり抑制されることが報告されている (for a review, Robbins & Krueger, 2005)。

例えば、Clement & Krueger (2002) は、最小条件集団パラダイムを用いて、内集団と外集団を実験室的に創り出し、実験参加者に、MMPIから選出された10個の性格特性を提示して、それらが自分に当てはまるか否か（自己の立場）を二者択一で回答させるとともに、内集団と外集団において、各項目に「当てはまる」と回答する人々の割合（合意性）を推定させた。その結果、内集団においては、「自己の立場」と「合意性推定値」との間に有意な正の相関が見出され、社会的投射が確認されたのに対して、外集団においては、こうした社会的投射は見出されなかった。

このような内集団—外集団非対称性が生じる理由は、「係留 (anchoring)」という判断ヒューリスティクスによって、以下のように説明される。すなわち、人は、「自己の立場」を内集団にとってのみ「関連する (relevant) もの」と見なしており、それが合意性推定に際して「係留点 (anchor)」として利用されるかたちで、合意性推定値が調整される（アンカリング）ためであるとされる (e.g., Clement & Krueger, 2002; Krueger, 2000)。

ただし、こうした内集団—外集団非対称性は、集団間状況下で常に生じるというわけではない。例えば、最近行った著者の研究（田村, 2007, 投稿中）では、合意性推定の際にどのような「手がかり」情報が利用されるかによって、集団間で異なった合意性推定パターンが見出されることが明らかになった。田村（2007, 投稿中）では、Clement & Krueger (2002) と同様、最小条件集団パラダイムを用いて、内集団—外集団状況を作り出した。その際、実験参加者にとって新奇な課題を実施し、自分自身の遂行結果（成功または失敗）を「手がかり」としてフィードバックされる場合（自己条件）と、内

集団他者や外集団他者の遂行結果を「手がかり」としてフィードバックされる場合（内集団他者条件，外集団他者条件）とで，集団間での合意性推定のあり方がどのように異なるのかについて検討した。その結果，内集団—外集団非対称性（内集団でのみ社会的投射）は，自己条件においてのみ見出され，内集団他者条件や外集団他者条件では，別様の合意性推定パターンが得られたのである。後者2つの条件では，当該他者の所属集団（内集団他者条件では「内集団」，外集団他者条件では「外集団」）では，手がかり情報と一致する立場に対する合意性が，不一致な立場よりも相対的に高く推定される一方，当該他者の非所属集団（内集団他者条件では「外集団」，外集団他者条件では「内集団」）では，逆に，それは相対的に低く推定されるという対比的な推定パターンが認められた。こうした結果は，手がかり情報の種類によって，異なった合意性推定プロセスが生起することを示唆している。

このように，近年の合意性推定研究においては，内集団—外集団という状況を実験パラダイムに新たに導入することにより，社会的投射プロセスの生起それ自体を左右する条件についての解明が進められるようになってきた（Krueger, 2000）。ただし，一口に「内集団—外集団状況」とは言っても，想定される集団間関係は，非競争的・協同的なものから競争的・葛藤的なものまでさまざまである。しかし，従来の合意性推定研究では，実験参加者を内集団や外集団に分類するのみで，集団間の関係そのものを実験変数として組み入れているものは見あたらない。

そこで，本研究では，内集団—外集団状況下で，2つの集団間関係を実験的に統制・操作し，集団間関係の違いによって，合意性推定のあり方がどのように異なるのかについて検討する。具体的には，最小条件集団パラダイムを用いて，内集団—外集団状況を作り出し，2つの集団の能力的な優劣を競わせる場合（競争条件）と競わせない場合（非競争条件）とを設定し，集団間での合意性推定パターンを比較検討する。

なお，能力的側面について検討したこれまでの研究（e.g., Alicke &

Largo, 1995; Sherman, Presson, & Chassin, 1984; 田村, 2007, 投稿中)では、ある課題に対する実験参加者自身の「遂行結果」(その内容は実験的に操作されているが)を「手がかり」としてフィードバックし、合意性推定を行わせている。しかし、現実場面では、自己の能力(遂行結果の出来不出来)に関する明示的なフィードバックが存在しない場合も多々ある。そのような場合には、「自分はこれくらい出来る／出来たのではないか」といった能力予期(結果予期)が、合意性推定に際して、明示的なフィードバックに代わる「手がかり」として利用されるのではないかと考えられるが、こうした点についての検討は、従来行われていない。そこで、本研究では、自己の遂行結果に関するフィードバックが与えられない状況下で、自己の能力に関する予期が集団全体にどのように投射されるのかについて検討を行う。

一般に、内集団と外集団が競争的關係にある場合には、非競争的關係にある場合に比べて、2つの集団間のカテゴリー差異がより強調されて知覚されると思われる(Holtz & Miller, 2001)。こうした状況下では、2つの集団を対比的に捉える認知的傾向が促進され(Cadinu & Rothbat, 1996; Mullen, Dovidio, Johnson, & Copper, 1992; Tajfel & Wilks, 1963; Gawronski, Bodenhausen, & Banse, 2005)、その結果、内集団と外集団とで対比的な合意性推定パターンが見出されると考えられる。具体的には、内集団においては、自己の能力に関する予期が集団全体に投射される(能力予期と合意性推定値が正の關係にある)「社会的投射」が見出されるのに対して、外集団においては、逆に、自己の能力予期と合意性推定値とは、負の關係にあるものと予測される(仮説1)。

これに対して、内集団と外集団とが非競争的關係にある場合には、従来の見解と同様、自己の能力に関する予期は、内集団の推定にのみ投射される(内集団—外集団非対称性)ものと予測される(仮説2)。

方 法

実験参加者

兵庫県下の公立の外国語大学学生48名（男性10名，女性38名）。平均年齢20.69歳（ $SD=6.13$ ）。

手続き

実験は，2つのステージ（1週間間隔）に分けて，心理学の授業時間の一部を利用し，集団で実施した。実験参加者には，実験が2回に分けて行われることが予告されていた。また，実験参加者は，予め「参加者番号」を割り当てられていた。

第1ステージ

最小条件集団パラダイムに基づき，内集団一外集団状況を作り出すための課題を行った。手続きは，田村（2007，投稿中）と同様であった。具体的には，「認知スタイル（ものごとの判断の仕方）の個人差を調べるための調査」（第1調査）と称し，実験参加者にとって新奇な認知的課題として「改訂版利き脳テスト」（坂野（1988）より抜粋）を実施した。

参加者は，調査冊子の所定欄に参加者番号を記入した後，自分のペースで課題に回答した。所要時間は，約5分であった。全員が回答し終えたのを確認した後，冊子を回収し，「この調査の結果については，次回（1週間後）に知らせる」と告げた。

第2ステージ

第1ステージの実験参加者と同一の参加者に対して，第2ステージを実施した。初めに，実験説明用の冊子1冊とマーク式の「解答用紙」1枚を配布し，解答用紙の所定欄に参加者番号をマークさせた後，実験内容の説明等を行った。教示は，すべて冊子に印刷されており，実験者の合図で，実験参加者が一斉に1ページずつページをめくるやり方で実験変数の操作や説明等を行った。

(1) 内集団—外集団状況の創出 最初に、第1調査の「結果」を参加者にフィードバックすることで、内集団—外集団状況を作り出した。まず、「先週行った第1調査では、皆さんの『認知スタイル』の個人差を調べました。認知スタイルの個人差には、『F型』と『G型』の2つのタイプがあります」という説明の後、実際の結果とは関係なく、全ての実験参加者に、「あなたの認知スタイルは、『F型』でした」とフィードバックした。

(2) 集団間関係の操作 次に、「パラレル情報処理能力を測定するための課題」と称し、合意性推定課題についての説明を行うなかで、集団間関係についての実験操作を行った。

初めに、「これから、『パラレル情報処理能力』を測定するための課題（第二調査）をやっていただきます。これは、複数の情報を、集中的に、同時（パラレル）に処理する能力を測るためのものです。今回の調査の目的は、第一調査で測定した『認知スタイル』の個人差（F型またはG型）と『パラレル情報処理能力』が、どのように関連しているかについて調べることにあります」という説明を行った。

その後、集団間関係の操作を行った。集団間で優劣を競わせる「競争条件」では、今回の調査の目的が、①認知スタイルがF型の人とG型の人のうち、どちらがより優れた「パラレル情報処理能力」を有しているのかを比較することにあること、また、②パラレル情報処理能力課題の成績がより優れていたグループのメンバー全員に、報賞（図書カード）が与えられることが告げられた。一方、「非競争条件」では、上記の教示の代わりに、今回の調査の参加者全員に御礼（図書カード）が与えられると告げられた。

(3) 合意性推定課題の提示 合意性推定課題は、田村（2007、投稿中）で使用したストループ課題を、一部改変して用いた。実験参加者は、練習試行を1試行行った後、本試行を10試行行った。各自の解答は、先に配布された「解答用紙」に記入してもらった。各試行のインターバルは、約1分間であり、参加者が解答し終えたのをその都度確認の後、次の試行に移っ

た。

なお、合意性推定課題については、前もって、本実験とは異なる実験参加者12名に予備調査を実施し、課題の難易度（7段階評定）や自己正答数の予測などについて回答を求めた。その結果、難易度の平均値は、5.67（ $SD=0.98$ ）であり、比較的難しい課題であると認知されていた。また、自己正答数の予測値（最大値は10）の平均は、5.83（ $SD=1.40$ ）であった。なお、正答数の実測値の平均は、7.67（ $SD=0.98$ ）であり、予測値の平均よりも有意に高かった（ $t(11)=3.53$, $p<.01$ ）。これらの結果からすると、本研究の合意性推定課題は、実験参加者にとって、比較的難しいものと認知され、また、自己の「遂行結果」を簡単には予測できないようなものであると言える。

合意性推定課題の本試行がすべて終了した後、解答用紙は、「結果集計のため」を装い、実験助手によってすぐに教室外に運び出された。

（4）課題関与度、及び、難易度の評定 課題関与度について、合意性推定課題に、どの程度熱心に取り組んだかについて、「とても熱心に取り組んだ（7点）～まったく熱心に取り組まなかった（1点）」の7段階で評定を求めた。また、合意性推定課題の難易度について、「とても難しかった（7点）～とても簡単だった（1点）」の7段階で評定を求めた。

その後、合意性推定課題に関する補足説明を行った。その際、本研究の参加者が外国語大学の学生であることを考慮して、課題に対する参加者の関心を高めるよう、以下のようなカバーストーリーを提示した。「第二調査で測定した『パラレル情報処理能力』とは、先程の説明のように、『複数の情報を、集中的に、同時（パラレル）に処理する能力』を意味しています。一般に、航空管制官や同時通訳者などには、この能力が高いことが要求されると言われています。先程の課題で、10問中6問以上正解の人は、パラレル情報処理能力が高く、5問以下の人は、この能力が低いと見なされます」。

この後、実験助手に、「集計結果」を装って、遂行結果のフィードバック

用冊子を携えて教室に入ってもらった。各冊子には参加者番号が付けてあり、参加者に個別に配布した。

まず、「認知スタイルが『F型』の人、『G型』の人、それぞれのグループ毎の全体結果については、分析にしばらく時間がかかります。そこで、今回は、あなたの結果についてのみお知らせします」と教示した。ただし、実際には、本研究の実験参加者には、自分自身の遂行結果がフィードバックされないため、上記の教示に引き続き、「なお、中には、解答欄の汚れやマークミス、その他の様々な理由で電算処理が出来ず、結果が表示されない（エラーが表示される）場合もありますが、ご了承下さい（その場合、希望者には、後日、結果をお知らせします）」と教示し、遂行結果がフィードバックされないことの「理由付け」を予め行っておいた。

その後、「コンピュータの出力結果」と称して、「遂行結果」を記した「診断シート」を提示した。そこでは、各自の参加者番号とともに、「認知スタイル『F型』のあなたのパラレル情報処理能力は、エラーのため、表示されません」という文章が提示された。

(5) 合意性推定 本研究における実験操作の有効性を高めるため、まず、集団間関係に関する次のような教示を再度行った（同様の手続きは、Holtz & Miller, 2001を参照）。競争条件では、「先述のように、今回の調査の目的は、認知スタイルがF型の人（F型グループ）とG型の人（G型グループ）とで、どちらがより優れた『パラレル情報処理能力』を有しているかについて比較することにあります。この調査は、他のクラスの学生に対しても実施されていますが、全体の分析が終了した後、F型グループとG型グループのうち、より優れた成績を示したグループの皆さん全員に、報賞として、「図書カード」を差し上げます」と教示した。また、非競争条件では、上記下線部のうち、前半部分を「認知スタイルがF型であるか（F型グループ）、G型であるか（G型グループ）が、『パラレル情報処理能力』とどのように関連しているかについて調べる」に代え、後半部分を「今回の調査に参加して

いただいた皆さん全員に、調査の協力への御礼として」に代えて、教示を行った。

その後、今回の調査の全体的な結果について予想してもらおうというかたちで、「内集団（「あなたと同じF型の人々」）と外集団（「あなたと異なるG型の人々」）について、「成功」（パラレル情報処理能力が高いと診断される人）と「失敗」（パラレル情報処理能力が低いと診断される人）の割合について、それぞれの合計が100%になるように回答してもらった。

（6）操作チェック

①競争心の評定 実験操作の有効性を確認するため、集団間での能力的な優劣をどの程度意識しているかについて尋ねた。具体的には、内集団（F型グループ）の成績の方が、外集団（G型グループ）の成績よりも、良い成績であってほしいとどの程度思っているかについて、「非常にそう思っている（7点）～まったくそう思っていない（1点）」の7段階で評定を求めた。

②重要度評定 合意性推定課題（第2調査）の結果に対する重要度について、「とても重要（7点）～まったく重要でない（1点）」の7段階で評定を求めた。

③好意度評定 内集団と外集団それぞれに対して、「非常に好意を感じる（7点）～まったく好意を感じない（1点）」の7段階で評定を求めた。

（7）自己の遂行能力の予期 合意性推定課題に関する自己の遂行能力の程度について、10問のうち何問正解したと思うかを予想してもらい、その数を回答してもらった。

最後に、実験全体に対する感想を参加者に自由記述させた後、デブリーフィングを行い、実験を終了した。

結果と考察

1. 操作チェックについて

まず、競争心についての評定結果をもとに、競争条件においては、評定値が2以下であった者、非競争条件においては、評定値が6以上であった者、あわせて計3名を、実験操作がうまくいかなかった者として、分析対象から除外した。その結果、競争条件には21名、非競争条件には24名の実験参加者が割り当てられた。なお、自由記述からは、今回の実験目的に疑いを持った者は見あたらなかった。

次に、集団間関係についての実験操作の有効性を確認するため、競争条件 ($M=5.38, SD=1.07$) と非競争条件 ($M=4.13, SD=0.85$) とで、競争心の平均評定値を算出し (Table 1), これらの値について条件間で t 検定を行ったところ、有意な差が得られ ($t(43)=4.38, p<.01$), 競争条件の方が非競争条件よりも、競争心が高かった。これにより、実験操作の有効性が確認された。

重要度 ($M=4.13, SD=1.01$), 課題関与度 ($M=5.76, SD=0.91$), 難易度 ($M=5.58, SD=0.94$) についても、競争条件、非競争条件別に平均評定値を算出し (Table 1), これらの条件間で t 検定を行った。その結果、重要度 ($t(43)=0.64, n.s.$), 課題関与度 ($t(43)=0.43, n.s.$), 難易度 ($t(43)=0.98, n.s.$) のいずれにおいても有意な結果は得られなかった。これ

Table 1 競争条件と非競争条件における各指標の平均値 (SD)

操作 チェック の各指標	競争条件		非競争条件	
競争心	5.38 (1.07)		4.13 (0.85)	
重要度	4.24 (1.18)		4.40 (0.86)	
課題関与度	5.76 (0.77)		5.75 (1.03)	
難易度	5.43 (1.08)		5.71 (0.81)	
好意度	内集団	外集団	内集団	外集団
	4.24 (0.83)	3.81 (0.60)	4.21 (0.88)	3.75 (0.67)

により、重要度、課題関与度、難易度は、実験条件間で異ならないことが確認された。なお、難易度の全体平均は、5.58 ($SD=0.94$) であり、予備調査の結果と同様、本研究の合意性推定課題は、比較的難しいものであると認知されていた。

また、内集団と外集団に対する好意度について、競争条件、非競争条件別に平均評定値を算出し (Table 1)、これらの値に対して、集団間関係 (競争、非競争) $\times$ 対象集団 (内集団、外集団) の分散分析を行った。その結果、対象集団の主効果のみ有意であり ($F(1,43)=22.15, p<.01$)、内集団 ($M=4.22, SD=0.85$) に対しての方が、外集団 ($M=3.78, SD=0.67$) に対してよりも、好意度が高かった。このような集団間バイアスが見出されたことは、本研究で作り出された内集団—外集団の集団カテゴリーが、実験参加者にとって、ある程度リアリティのあるものとして捉えられていたことを示していると言えるだろう。

2. 自己の能力予期が集団間状況下での合意性推定に及ぼす影響について

本研究の実験参加者は、合意性推定の際に、自己の能力 (遂行結果の出来不出来) に関する明示的なフィードバックが与えられていなかった。先述のように、こうした状況下では、「自分はこれくらい出来たのではないか」といった自己の遂行能力に関する予期が、推定の際の「手がかり」の一つになりうるものと思われる。

こうした前提に立ち、自己の能力予期が内集団や外集団全体にどのように投射されるのか、また、それは、集団間関係が競争的であるか非競争的であるかによってどのように異なるのかについて検討するため、集団間関係、及び、対象集団毎に、自己の能力予期値 (10問のうち、何問正答したと思うか) と「成功」に対する合意性推定値との相関係数を求めた (Table 2)。

なお、これに先だって、競争条件 ($M=4.81, SD=1.63$) と非競争条件 ($M=4.63, SD=1.17$) における自己の能力予期値の平均を求め、これらの条件

Table 2 各実験条件における自己の能力予期値と合意性推定値との相関分析結果

集団間関係	対 象 集 団	
	内 集 団	外 集 団
競争条件	.685**	-.486*
非競争条件	.389 ⁺	.123

** $p < .01$, * $p < .05$, ⁺ $p < .10$

間で t 検定を行ったところ、有意な差は見られなかった ($t(35.81) = 0.43$, $n.s.$)。これにより、自己の能力予期の程度に関しては、条件間で異ならないことが確認された。¹⁾

自己の能力予期値と合意性推定値に関する相関分析の結果、Table 2 に示されるように、競争条件と非競争条件では、自己の能力予期と合意性推定値との関連の様態が異なることが明らかになった (Table 2)。

まず、競争条件においては、内集団に関する推定では、自己の能力予期値と合意性推定値との間に、比較的強い正の相関が見出された ($r = .685$, $p < .01$)。これは、自己の遂行能力を高いものであると予想するほど、内集団全体の「成功」の割合が高く推定されるということを示しており、自己の能力予期が集団全体に投射される「社会的投射」が見出された。これに対して、外集団に関する推定では、自己の能力予期値と合意性推定値との間には、比

- 1) なお、本研究の課題事態に関して、「成功」に対する合意性推定値がどの程度見積もられるのかについての基本的 (ベースライン的な) 傾向を把握するため、集団間関係 (競争, 非競争)、及び、対象集団 (内集団, 外集団) 毎に「成功」に対する合意性推定値の平均を求め、これらの値に関して、集団間関係×対象集団の分散分析を行ったところ、対象集団の主効果のみが見いだされた ($F(1,43) = 8.19$, $p < .01$)。すなわち、今回の課題事態においては、集団間関係が競争のか非競争のかに関わりなく、外集団における「成功」の割合 ($M = 53.73$, $SD = 10.42$)の方が内集団におけるそれ ($M = 45.60$, $SD = 12.29$) よりも、有意に高く見積もられていた。本研究では、最小条件集団パラダイムに基づいて内集団－外集団状況を作り出したが、一般に、内集団－外集団状況下では、内集団を外集団よりも好意的／有利に位置づける「内集団ひいき」現象が見出されることが少なくない。しかし上記のように、本研究では、内集団における「成功」の割合を、外集団のそれよりも高く推定するといった内集団ひいき現象は、観察されなかった。これは、本研究の合意性推定課題のような能力的な側面に関しては、ある程度、正確な査定が可能であるため、そもそも、公的にも私的にもポジティブ幻想が生じにくいこと (Allison, Messick, & Goethals, 1989) に加え、今回の推定課題が実験参加者にとってかなり難しいものと感じられており、そのために、(自分が所属する) 内集団全体における「成功」の割合があまり高く見積もられなかったためではないかと思われる。

較的強い負の相関が見出された ($r = -.486, p < .05$)。これは、自己の遂行能力を高いものであると予想するほど、外集団全体の「成功」の割合を低く推定するというを示しており、内集団推定とは逆に、自己の能力予期と合意性推定値とが負の関係にあることが見出された。このように、競争条件においては、内集団と外集団とで対比的な合意性推定パターンが見出され、仮説 1 が支持された。

一方、非競争条件においては、上述とは異なる合意性推定パターンが見出された。内集団に関する推定においては、自己の能力予期値と合意性推定値との間に、弱いながらも正の相関が見出される傾向が認められ ($r = .389, p = .61$)、自己の能力予期が集団全体の推定に投射される「社会的投射」が見出される傾向にあった。これに対して、外集団に関する推定においては、自己の能力予期と合意性推定値との間には、ほとんど相関が見出されなかった ($r = .123, n.s.$)。このように、非競争条件においては、抑制的ではあるものの、内集団においてのみ、社会的投射が見出される（内集団—外集団非対称性）傾向にあり、仮説 2 が一応支持されたと言えよう。

上記の結果は、本研究のような課題遂行事態において、自己の遂行能力に関する明示的なフィードバックがない場合には、自己の遂行能力に関する「予期」が合意性推定の際の「手がかり」として利用されうること、ただし、その利用のされ方——推定プロセス——は、集団間関係のありようによって異なることを示している。すなわち、集団間関係が競争的な場合には、集団間で対比的な合意性推定プロセスが促進され、集団間関係が非競争的な場合には、内集団にのみ自己（の能力予期）が投射されるアンカリングによる合意性推定プロセスが促進されるものと言えよう。

先述のように、田村（投稿中）では、手がかりとして、内集団メンバーや外集団メンバーに関する情報（遂行結果のフィードバック）が与えられた場合には、対比的な合意性推定プロセスが、自己に関する情報が与えられた場合には、アンカリングによる合意性推定プロセスが生起していた。こうした

結果や本研究の結果を踏まえれば、対比的な合意性推定プロセスは、内集団メンバーや外集団メンバーに関する情報²⁾が提示されたり、内集団と外集団とが競争的關係にあることなどにより、「集団カテゴリー」に対する注意が高められた状況下で促進されると思われる。一方、アンカリングによる合意性推定プロセスは、自己に関する具体的な情報（遂行結果）が与えられたり、自己に関する何らかの予期（能力予期）が想起されたりするなど、「自己」に対する注意が高められた状況下において促進されると思われる。すなわち、集団間状況下でどのような合意性推定プロセスが見い出されるかは、「自己」や「集団カテゴリー」への注目度の違いによって、左右されるのではないかと考えられるのである。

なお、先述のように、非競争条件において、自己の能力予期は、内集団推定に投射される傾向（社会的投射）が見出されたが、それは、やや抑制的なものに止まっていた。これは、本研究の実験参加者が、自己の遂行結果のフィードバックがない状況下で、推定を行ったことによるものと思われる。このような場合には、自己の能力に関する「手がかり」が非明示的で漠然としたもの（予期）であったため、自己の能力に関する明確な遂行結果／根拠を「手がかり」として与えられた場合（田村、投稿中）に比べて、「自己」に関する活性化（注目）の度合いが低く、自己を内集団に投射するアンカリングプロセスが抑制されたのではないかと考えられる。今後は、自己についての明示的な遂行結果を与えられた場合についても検討し、集団力学や手がかり情報のありようが合意性推定プロセスにどのような影響を及ぼすのかについて、より包括的なモデルの構築を進めていく必要があるだろう。

2) 田村（投稿中）では、内集団メンバーや外集団メンバーに関する遂行結果をフィードバックする際、これらの情報は、「コンピュータによってランダムに（無作為）に選び出された一人の結果」であると教示されていた。このような教示は、当該メンバー情報（事例）の代表性（representativeness）を高め、（それが所属する）集団カテゴリーへの注目を促進する役割を果たすものと考えられる。

今後の展開に向けて

本研究では、内集団—外集団状況下で、合意性推定のあり方について検討したが、そこで指定されていたのは、互いに排他的な、いわば、水平的関係 (Krueger, 1998) にある2つの集団であった。一方、現実場面においては、複数の集団 (カテゴリー) が階層的／垂直的に重なり合うような関係も指定される。そこでは、階層的に下位にある複数の排他的な集団は、階層的に上位の集団に内包されるという関係にある。例えば、「女性」対「男性」という集団カテゴリーは、いずれもが「日本人」という上位集団におけるサブカテゴリーとしても位置づけられるように。

このような場合、上位集団に関する合意性推定のあり方は、下位集団 (内集団や外集団) に関する合意性推定のあり方をどのように反映するのだろうか。そこでは、内集団に関して推定された合意性が、そのまま、上位集団に関するそれに反映・投射される (Krueger & Zeiger, 1993) のだろうか。あるいは、内集団と外集団に関して推定された合意性に基づいて、それぞれが折半されるかたちで、上位集団における合意性が見積もられるのだろうか。

この問題は、社会的合意性の「射程」——人が『社会的な合意がある』と言う場合、そこで想定されている「社会」(集団) は、どこまで (の集団) を含むのか——という理論的考察と関連するだけでなく、例えば、下位集団間の競争・葛藤的關係を乗り越えて、(上位集団である)「社会」全体において、合意性の高い「世論」の形成はいかにして可能なのか、といった実践的問題とも深く関わる重要なものであると思われる。

しかし、従来、こうした観点から、垂直的 (上位—下位) 関係にある集団間での合意性推定のあり方について検討している研究は、ほとんどなく、これまでのところ、Krueger & Zeiger (1993) の研究のみがそれに当たると思われる。

彼らの研究では、性別カテゴリーによって内集団—外集団状況を作り出し、実験参加者に、MMPI から選出された18個の性格特性を提示し、それらが

自分に当てはまるか否か（自己の立場）を二者択一で回答させるとともに、内集団や外集団において、各項目に「当てはまる」と回答する人々の割合（合意性）を推定させた。それと同時に、性別カテゴリーを内包する上位集団である「成人」集団全体に関しても、合意性を推定させた。その結果、下位カテゴリー（「男性」対「女性」）間においては、内集団においてのみ「社会的投射」が認められ、内集団—外集団非対称性が見出された。一方、上位集団（「成人」全体）に関しても「社会的投射」が認められたが、それは、内集団における社会的投射をほぼ踏襲するものであった。このことは、上位集団における合意性推定が、専ら、内集団に関する推定のみを上位集団に投射するかたちで行われることを示唆している。つまり、そこでは、外集団は考慮の範疇外に置かれるというわけである（Krueger, 1998）。

ただし、彼らの研究で検討されているのは、「性格特性」という非葛藤的、非競争的な事柄に関する合意性推定のみである。³⁾ 下位集団（内集団—外集団）間で、一方の利益が他方の不利益になりうるような葛藤的、競争的な事柄が合意性推定の対象となった場合には、Krueger & Zeiger (1993) とは異なった見解が得られる可能性もある。例えば、本研究では、内集団と外集団が競争的關係にある場合には、集団間で対比的な推定パターンが見出されていたが、こうした状況下では、これらをサブカテゴリーとするより上位の集団における合意性推定は、サブカテゴリーそれぞれに関して推定された合意性推定値を折半するようなかたちで行われるのかも知れない。また、合意性推定の際の「手がかり」としてどのような情報が利用可能であるかによっても、合意性推定のありようは異なるかも知れない。すなわち、内集団に関する情報と外集団に関する情報のどちらがより活性化され、利用可能性が高まっているかによって、上位集団における合意性推定のあり方が影響を受ける可能性もある。

3) Krueger & Zeiger (1993) において使用された性格特性項目は、全体の 1/3 が男性的特性項目、1/3 が女性的特性項目、残り 1/3 が中性的項目であり、全体として、男女間での評定バイアス（対立的要素）を出来るだけ排除するように作成されていた。

今後は、このように、垂直的関係にある集団間での合意性推定についても検討を行い、現実場面への適用可能性の高い知見を積み重ねていく必要があるだろう。

引用文献

- Alicke, M. D., & Largo, E. (1995). The role of the self in the false consensus effect. *Journal of Experimental Social Psychology*, **31**, 28-47.
- Allison, S. T., Messick, D. M., & Goethals, G. R. (1989). On being better but not smarter than others: The Muhammad Ali effect. *Social Cognition*, **7**, 275-296.
- Cadinu, M. R., & Rothbart, M. (1996). Self-anchoring and differentiation processes in the minimal group setting. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 661-677.
- Clement, R. W., & Krueger, J. (2002). Social categorization moderates social projection. *Journal of Experimental Social Psychology*, **38**, 219-231.
- Gawronski, B., Bodenhausen, G. V., & Banse, R. (2005). We are, therefore they aren't: Ingroup construal as a standard of comparison for outgroup judgments. *Journal of Experimental Social Psychology*, **41**, 515-526.
- Holtz, R., & Miller, N. (2001). Intergroup competition, attitudinal projection, and opinion certainty: Capitalizing on conflict. *Group Processes and Intergroup Relations*, **4**, 61-73.
- Krueger, J. (1998). On the perception of social consensus. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, Vol.30, pp.163-240. San Diego, CA: Academic Press.
- Krueger, J. (2000). The projective perception of the social world: A building block of social comparison processes. In J. Suls & L. Wheeler (Eds.), *Handbook of social comparison: Theory and research*, pp.323-351. New York : Plenum/Kluwer.
- Krueger, J., & Zeiger, J. S. (1993). Social categorization and the truly false consensus effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 670-680.
- Marks, G., & Miller, N. (1987). Ten years of research on the false-consensus effect: An empirical and theoretical review. *Psychological Bulletin*, **102**, 72-90.
- Mullen, B., Dovidio, J. F., Johnson, C., & Copper, C. (1992). In-group-out-

- group differences in social projection. *Journal of Experimental Social Psychology*, **28**, 422-440.
- Mullen, B., & Hu, L. (1988). Social projection as a function of cognitive mechanisms: Two meta-analytic integrations. *British Journal of Social Psychology*, **27**, 333-356.
- Ross, L., Greene, D., & House, P. (1977). The “false consensus effect”: An egocentric bias in social perception and attribution processes. *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**, 279-301.
- Robbins, J. M., & Krueger, J. I. (2005). Social projections to ingroups and outgroups: A review and meta-analysis. *Personality and Social Psychology Review*, **9**, 32-47.
- 坂野 登 (1988). *子どものころを読む* 青木書店
- Sherman, S. J., Presson, C. C., & Chassin, L. (1984). Mechanisms underlying the false consensus effect: The special role of threats to the self. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **10**,
- Tajfel, H., & Wilks, A. L. (1963). Classification and qualitative judgment. *British Journal of Psychology*, **54**, 101-114.
- 田村美恵 (2007). 合意性推定時の内集団バイアスの生起について—社会的カテゴリー化の下での検討— 神戸外大論叢, **58** (4), 21-36.
- 田村美恵 (投稿中). 集団間状況下での合意性推定——自己, 内集団他者, 外集団他者に関する手がかり情報の影響について——